

〔資料〕

保育園・幼稚園における基礎看護学実習の教育的意義の検討（第一報）

守屋 治代* 見城 道子* 小笠原 広実*
 松岡 牧* 菊池 昭江* 瀧 断子*

INVESTIGATION OF EDUCATIONAL SIGNIFICANCE OF BASIC NURSING
 PRACTICAL TRAINING IN NURSERY SCHOOLS AND KINDERGARTENS (REPORT 1)

Haruyo MORIYA * Michiko KENJOH * Hiromi OGASAWARA *
 Maki MATSUOKA * Akie KIKUCHI * Tatsuko TAKI *

本研究では、保育園・幼稚園において実施している本学基礎看護学実習Ⅰの教育的意義について、学生のレポート内容を帰納的に分析し明らかにした。その結果、〈人間は日々成長・発達する〉〈人間は、環境に影響される〉〈人間には個人による違いがある〉〈人間は社会生活をとおして成長・発達する〉〈対象理解には社会環境の把握が必要である〉〈人間関係を成立させる関わり方がある〉〈援助者の相手への関わりが成長・発達に影響する〉〈もてる力の発達を促す働きかけが大切である〉〈学んだことは看護に発展できる〉という9つの学びの内容が析出された。また、学生が用いていた学びの方法には、〈特定の子どもに注目する〉〈子どもの対応に困惑する〉〈観察結果を比較する〉〈指導者を参考にする〉〈既習知識を活用する〉〈具体と抽象を結びつける〉の6つがみられた。

以上を検討した結果、基礎看護学実習Ⅰにおいては、次のような教育的意義を見出すことができた。集団の中での個の反応と個への援助者としての関わりを教材に、人間が社会環境のなかで形成され、その援助のあり方について「抽象化」「具象化」の往復を繰り返すことで、「健康・不健康あるいは発達段階を問わずどのような状態にあっても、人間の成長の可能性を捉え、それを援助する」という看護の基盤となる認識が形成されている。

キーワード：看護学生、基礎看護学実習、保育園・幼稚園、教育的意義

Abstract

This study aimed to clarify basic nursing practical training before students develop nursing processes by being in charge of patients. We performed an inductive analysis of student feedback regarding educational significance of the University's basic nursing practical training carried out in nursery schools and kindergartens. As a result, the following nine items that the students believed were important to learn were detected: <Personal growth>, <Effect of the environment on human beings>, <Individual differences between people>, <Appreciation of the social environment as a factor necessary for understanding a person>, <Personal development through social life>, <Ways in which human relationships are established>, <Involvement of support people as a factor influencing a person's growth>, <Importance of working on persuasion of development of self-confidence>, and <Application of what one has learned to the practice of nursing>. Regarding the learning method used by students, the following six areas of concern were detected. <The need to pay more attention to certain children>, <Feeling perplexed as to how to deal with children>, <The need to compare theoretical knowledge with that gained by observation>, <The need to follow the example of leaders>, <The need to utilize knowledge already learned>, and <The need to link the concrete with the abstract>.

From the above analysis, we were able to find the following educational significance in this practical training. Individual response in a group and the relationships between people in a group are the learning materials here. Students recognized that human beings are formed in the social environment and learned how to support this process, by repeatedly moving between abstract and concrete forms of learning. Doing so creates the understanding that enables students to form a basis for later development of nursing practice. In other words, this training prompts students to recognize and seize possibilities for growth of human beings in any condition, "irrespective of their developmental phase or level of health".

Key Words: Nursing student, Basic nursing practical training, Nursery school and kindergarten, Educational significance

*東京女子医科大学看護学部 (Tokyo Women's Medical University School of Nursing)

I. はじめに

1. 研究の動機

基礎看護学実習は、学生が看護の基本的な概念について、臨地での体験的理解を通し自明化していくプロセスの初期の学習である。経験の未熟な学生にとって、既習の看護に関する基本的で重要な概念について、実感を伴う豊かなイメージを育んでいくことは重要である。本学の基礎看護学実習Ⅰにおいては、そのための学習の場を保育園・幼稚園においている。他職種の専門施設ではあっても、子どもとの関わりの場を、看護の概念に照らし合わせる方向で指導していけば、看護の専門性に立った学習が可能であることについては、経験的に手ごたえを感じてきているところである(守屋, 2002)。しかしこの報告で取り上げられたのは、少数の学生の一部のデータに限られている。また、これまでに小野ら(2001)、鈴木ら(2002)が、受け持ち患者の看護過程を展開する前段階の基礎看護学実習について、違った教育方法による教育成果を報告している。しかし、健康な乳幼児施設で基礎看護学実習を行った場合の教育的意義については、まだ詳細な報告がされていないことから、本研究に取り組む意義は大きいといえる。

2. 研究目的

基礎看護学実習Ⅰにおいて成立している学生の学習内容および学習プロセスの特徴を学生のレポートを基に分析し、保育園・幼稚園における基礎看護学実習がもつ教育的意義を明らかにする。それにより、健康・不健康を問わない看護の対象のみつめ方、あるいは、小児看護学、成人看護学といった領域を超えその基盤となる対象のみつめ方を可能にする実習のあり方を検討する。

なお今回は、一部の学生のレポートを採用して学生の学びの特徴を明らかにし、第1報とする。

II. 研究の概念的な前提

本研究は、学生の記述したレポート内容を分析対象とすることから、認識の形成に関する基本的な理論を前提としている。それらは、吉田(1995)の述べる「教育の心理」を参考にした看護学に関する認識の形成に関する次の4点である。

1. 認識は、外的に存在している認識対象を、対人的な相互作用の過程とそれを個人が自己のものとし

て内化していく過程との2つを通して成立していく。学生は、看護学に関する基本的な知識や概念(言葉)を教授されており、学生個人が自分自身の内部構造、順次性、自分自身の展開の論理のもとに、教授された概念を取り入れていく。

2. 学生の内部で行われるこの認識過程は、再びことばや行動として表現されることによって教師に理解可能となる。
3. 認識の発達には、「抽象化」と「具象化」の往復を繰り返すことが必要である。抽象世界と具象世界が互いに照らし合い、補い合い、重なり合うことによって、学生の認識は深まっていく。
4. 学生は実習のなかで、看護学生として人間として様々な体験をしているが、教師が意図的な問いを設定することで、体験を意味づける方向性を規定し学習の主題化を図ることができる。意図的な問いとしての、基礎看護学実習Ⅰの実習目的・目標は、次の通りである。

実習目的:

- 1) 乳幼児の生活の実際を通して、人間、社会環境、健康の基本的な関係について、看護の視点から考える。
- 2) 人間関係を成立・発展させるための関わりのあり方を考える。

実習目標:

- 1) 乳幼児の生活の実際をみつめ、人間、人間の健康・生活がどのように形成されていくのかを理解する。
- 2) 乳幼児のもてる力について考える。
- 3) 相手とところの交流のある関係を成立・発展させるためには、どのような関わりをしなければよいのかを考える。

III. 研究方法

1. 研究対象

T大学看護学部平成14年度入学生83名中、研究に協力が得られた43名の平成14年度の基礎看護学実習Ⅰ(1年次、10月～12月に実施)終了後に提出されたレポートの記述内容である。学生は、18歳～22歳である。

43名のレポートをナンバリングし、今回は研究第1報として、そのうち他教育機関での看護学の学習経験や臨床経験がある者を除くことのみを選択基準とした。NO. 1～5の5名のレポートを分析対象とした。

2. 分析レポートの背景

実習は、保育園・幼稚園で3日間行い、保育士や幼稚園教諭と一緒に乳幼児たち（1歳～6歳）の日常生活の援助をしながら見と関わるという方法で行われている。学生には、基礎看護学実習Ⅰの実習目的・目標を念頭におき、実習での体験の具体的場面の中から、各自が学び得たと思われることについてレポートを書き、字数が800～1200字であることが告げられている。また、実習目標の達成度が評価されることが、実習前に伝えられている。さらに実習前に、看護学概論（看護の概念、看護の目的、看護の対象—小児期も含む）が終了している。

3. データ収集方法

研究目的と研究への協力依頼について説明を行い、協力の意思のある学生のレポートを回収箱に回収した。

4. データ分析方法

1) 分析方法1（「学びの内容」の析出）

- (1) レポートを丹念に読み、学生が伝えようとしている意味内容が1つのまとまりと判断されるものを分析単位とする。
- (2) 1つの分析単位の中から、学生が伝えようとしている内容のキーセンテンスを選択する。
- (3) (2)の文章を前後の文脈を意識し、「学生は何を学んだのか」という観点から、学びの内容を抽出する。これを「カテゴリー1」とする。
- (4) 5名のレポートの「カテゴリー1」の内容の共通性を見だし、グルーピングを行う。見出された共通性を記述し、これを「カテゴリー2」とする。
- (5) 共通性の内容をより抽象的な言葉に置き換える。これを「カテゴリー3」とする。

2) 分析方法2（「学びの方法」の析出）

- (1) レポートを丹念に読み、学生にとって1つの体験内容となっていると判断されるまとまりを分析単位とする。
- (2) 1つの分析単位の中から、実際に学生の体験として記述されているもの、及び既習知識といえる文章をキーセンテンスとして選択する。
- (3) (2)の文章を、「学生はどのように学んだのか」という観点から、「学び方の特徴」を抽出する。これを「カテゴリー1」とする。
- (4) 5名のレポートの「カテゴリー1」の内容の共通性を見だし、グルーピングを行う。見出された共通性を記述し、これを「カテゴリー2」とする。

- (5) 共通性の内容をより抽象的な言葉に置き換える。これを「カテゴリー3」とする。

以上の分析プロセスは、分析結果の信頼性と妥当性を高めるため、複数の研究者間で検討を重ねた。

5. 倫理的配慮

レポートの使用にあたり、学生に使用目的、研究以外には使用しないこと、個人が特定されることはないことを口頭及び文書で説明した。また、研究への協力は自由であること、実習評価には何ら影響しないことを説明した。学生には研究結果を報告することを伝えた。同意を得られた者からは、「レポート使用に関する承諾書」を提出してもらった。

Ⅳ. 結果

1. 学びの内容

学生の学びの内容として、次の9つのテーマが析出された。詳しくは、表1に表した。

①人間は、日々成長・発達する

学生は、幼児期の著しい成長・発達の様子を捉えており、「人間は、日々成長・発達するものである」ことを学んでいる。

②人間は、環境に影響される

学生は、人間は自然環境の影響を受けてそれに対処していることや、周囲の人との意思疎通がスムーズに行えない社会環境に置かれた際の人間の反応に関して捉えており、人間への環境の影響について学んでいる。さらに環境のなかでも、家庭内の親や教師の関わりといった人的環境が人間の成長・発達に及ぼす影響について理解している。

③人間には、個人による違いがある

人間の成長・発達には、集団生活や教育の影響により個人差が出てくること、成長・発達の過程のなかで、遊びに各自のこだわりがみられるなど、成長・発達に伴い人間には個人により違いがあることが学ばれている。

④人間は、社会生活をとおして成長・発達する

学生は、人間が様々な社会生活の過程を経ることによって、健康的に人間として成長・発達していくことを学んでいる。それらは同年代の者との集団生活、大人との関わりや教育といった、相互に交流する機会をとおした他者の影響を受けることによってであることを理解している。

⑤対象理解には、社会環境の把握が必要である

学生は、対象を理解するためには、個人が置かれた社会環境を捉え考慮した関わりが必要であることを学んでいる。

⑥人間関係を成立させる関わり方がある

学生は、心の交流のある人間関係を成立・発展させるための関わりのあり方について学んでいる。例えば、不安な状況にある人への関わりや家庭での愛情の満たされ方に応じた関わりである。相手の反応を感知し、相手の立場から考え相手に伝わる表現が必要であることを学んでいる。

⑦援助者の相手への関わり方が成長・発達に影響する

学生は、援助者の関わり方が相手の成長・発達に影響することを学んでいる。例えば、相手の気持ちを引き出す関わり、何気ない一言を聞き逃さない関わり、子どもの発想を生かす関わりが、相手の成長・発達を促すことを理解している。

⑧もてる力の発達を促す働きかけが大切である

学生は、相手の自立度をよく把握した上での配慮がもてる力の発達を促し、達成感や自信を生み出すことを学んでいる。

⑨学んだことは、看護に発展できる

学生は、人間への援助や教育一般としてではなく、学んだことを看護の関わりとして意識して発展させた考察をしている。それらの内容は、看護は相手の気持ちを引き出す関わり、生活過程や社会環境を理解考慮した関わり、信頼関係を築き個々の患者に応じた関わりであること、また看護は相手の成長・発達を援助するものである、という理解である。

2. 学びの方法

学生の学びの方法として、次の6つの特徴的な学び方が析出された。詳しくは、表2に表した。

①特定の子どもに注目する

学生は、ある特定の子どもに注目し、その子どもの示す反応を基に学びを発展させている。例えば、集団生活の中で気になる子ども、他の子どもと異なる反応をする子ども、甘える子ども、教育を受ける機会の少ない子ども、集団生活経験の少ない子どもである。

②子どもの対応に困惑する

学生は実際に子どもと関わるなかで、行動を促しても変化しなかった子どもや甘える子どもといった、子どもの反応に困惑した体験を通して学んでいる。

③観察結果を比較する

学生は、様々な観察結果を比較することによって

学んでいる。それらは、同年齢の子どもの生活自立度、生活態度、日常生活の様子それぞれの比較、また年齢の異なる子どもの学生への要求、運動機能、喧嘩の解決方法のそれぞれの比較、さらに子どもへの関わりの失敗体験と成功体験の比較や自分の関わりと教師の関わりの比較である。

④指導者を参考にする

学生は、指導者の助言や子どもへの実際の関わりの意味を考えることを通して学んでいる。例えば学生は、教師の関わりにより子どもの遊びが広がる様子、教師が子どもの個別な反応を捉えて関わっている様子、年齢の変化により子どもの喧嘩への教師の介入度が変化する様子を捉えている。

⑤既習知識を活用する

学生は、基礎看護学や人間発達論やそのほかの文献から得た知識や自己の擬似体験を活用し、出来事の根拠を考察したり自分の考えをより深めている。

⑥具体と抽象が結びつく

学生は、自分が目にした具体的な事象をより抽象的な概念と結びつけることで、事象のもつ意味をより深く理解したり、敷衍を行いより広い範囲への適用を図っている。例えば、健康な幼児の成長・発達の妨げになる状況を看護の対象の環境へと置き換えて理解したり、子どもの個別な反応を家庭環境の特殊性と結びつけている。

表1 学びの内容

カテゴリー 3	カテゴリー 2	カテゴリー 1
人間は、日々成長・発達する	<ul style="list-style-type: none"> ・成長は著しい ・人間は日々成長 ・微細運動の発達 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児期の成長は著しい ・幼児期に人間は、日々成長している ・微細運動の発達により遊びのなかにもそれぞれの子のこだわりが表現される
人間は、環境に影響される	<p><人間への環境の影響></p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境の影響 ・自然環境の影響 ・周囲の人との意思疎通がスムーズに行えない環境 <p><人的環境が成長に影響する></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭内の親の関わり ・教師の関わり 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間は、環境の影響を受けて生きている ・人は自然環境の影響に対処して、あるいはその援助を受けて生きている ・人は、周囲の人との意思疎通がスムーズに行えない環境では、孤立や不安、消極的な反応を示す ・生活習慣の自立の違いは、家庭内の親の関わりによって影響される ・教師の関わりにより、自分の力で問題を解決していく力を身につけ、それに伴い豊かな感情が育まれる
人間には、個人による違いがある	<ul style="list-style-type: none"> ・発達には個人差 ・発達の個人差は、集団生活や教育の影響による ・それぞれの子のこだわり 	<ul style="list-style-type: none"> ・人は、学習を通し、また加齢とともに発達し、発達には個人差がある ・発達の個人差は、集団生活や教育を受けることによって影響される ・微細運動の発達により、遊びのなかにもそれぞれの子のこだわりが表現される
人間は、社会生活をとおして発達する	<ul style="list-style-type: none"> ・友達や大人との関わりから ・コミュニケーションや刺激を受けて ・学習を通して ・集団生活や教育を受けることによって ・同年代の幼児たちと集団で生活することで ・相互に交流する機会を高め、他者の影響を受けて ・仲間との遊びを通じた集団生活のなかで 	<ul style="list-style-type: none"> ・人は幼児期に友達や大人との関わりから学習していく ・人間理解には、人は遊びや学習の中からコミュニケーションや刺激を受けて成長・発達するという視点が重要 ・人は、学習を通し、また加齢とともに発達し、発達には個人差がある ・発達の個人差は、集団生活や教育を受けることによって影響される ・同年代の幼児たちと集団で生活し、その年齢に合った教育を受けることで、人間として健康に発達していく ・幼児期の年齢に特徴的な遊びを通して、相互に交流する機会を高め、他者の影響を受けることにより、経験や知識の幅を広げていく ・仲間との遊びを通じた集団生活のなかで社会生活を理解していく
対象理解には、社会環境の把握が必要である	<ul style="list-style-type: none"> ・対象理解には、社会環境の把握が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・対象を理解するためには、個人の置かれた社会環境を捉え考慮した関わりが必要
人間関係を成立させる関わり方がある	<ul style="list-style-type: none"> ・理解しようとする姿勢、聞く姿勢、相手にわかりやすく言い換える関わり ・愛情の満たされ方に応じた関わり ・相手の反応を感知し、相手の立場から考え、相手に伝わる表現 	<ul style="list-style-type: none"> ・不安な状況にある人には、理解しようとする姿勢、聞く姿勢、相手にわかりやすく言い換える関わりが必要 ・家庭での愛情の満たされ方に応じた関わりが、精神的欲求を満たす ・心の交流のある関係を成立・発展させるためには、相手の反応を感知し、相手の立場から考え、相手に伝わる表現をする
援助者の相手への関わり方が成長に影響する	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の気持ちをひきだす関わり ・何気ない一言を聞き逃さない ・子ども発想を生かす 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際にやってみせ、相手の気持ちを引き出す関わりが成長を促す ・相手を理解把握することで、何気ない一言も聞き逃さず、相手の立場から考えられ、遊びのなかの子供の発想を生かし学習を広げる関わりになる
もてる力の発達を促す働きかけが大切である	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の自立度をよく把握したうえでの配慮 ・自分でできることをやるように働きかける 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の自立度をよく把握した上での自立・自律への配慮が、もてる力の発達を促し、達成感や自信を生み出す ・自分でできることを自分でやるように働きかけることは、子どもにも患者にも大切である
学んだことは、看護に発展できる	<ul style="list-style-type: none"> ・看護は、相手の気持ちを引き出す関わりが重要 ・看護師は、生活過程や社会環境を理解考慮した関わり ・信頼関係を築き、個々の患者に応じた看護 ・看護は、発達を援助する 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育も看護も相手の気持ちを引き出す関わりが重要な点で類似性がある ・看護師には、患者の認識力を形成してきた生活過程や社会環境を理解し考慮した関わりから、信頼関係を築き、個々の患者に応じた看護が求められている ・看護は、単に病気の治療だけでなく、発達を援助し、閉鎖された環境である入院生活においても同様である

表2 学びの方法

カテゴリー3	カテゴリー2	カテゴリー1
<p>特定の子どもに注目する</p>	<p><注目する> <ul style="list-style-type: none"> ・集団生活の中で気になる子ども ・他の子どもと異なる反応をする子ども ・教育を受ける機会の少ない子ども ・集団生活経験の少ない子ども </p>	<ul style="list-style-type: none"> ・集団生活の中で気になる子どもの行動に注目し、行動を促しても変化しなかった（失敗体験）が、自分が見本を見せる行動をとったところ相手に変化（成功体験）するという体験をした ・他の子どもと異なる反応をする子に注目し、自己の似た体験を活用して思いを推測している ・甘える子どもの対応に困惑し、教員に相談した結果、家庭による愛情の注がれ方の違いを助言され、子どもの個別な反応と家庭環境の特殊性が結びついた ・教師から情報を得て、教育を受ける機会の少ない子どもの日常生活と集団生活経験の少ない子どもの生活態度を観察した
<p>子どもの対応に困惑する</p>	<p><困惑する> <ul style="list-style-type: none"> ・行動を促しても変化しなかった子どもへの対応 ・甘える子どもへの対応 </p>	<ul style="list-style-type: none"> ・集団生活の中で気になる子どもの行動に注目し、行動を促しても変化しなかった（失敗体験）が、自分が見本を見せる行動をとったところ相手に変化（成功体験）するという体験をした ・甘える子どもの対応に困惑し、教員に相談した結果、家庭による愛情の注がれ方の違いを助言され、子どもの個別な反応と家庭環境の特殊性が結びついた
<p>観察結果を比較する</p>	<p><比較する> <ul style="list-style-type: none"> ・同年齢の子どもの生活自立度 生活態度 日常生活 ・年齢の異なる子ども 学生に対する要求 運動機能 喧嘩の解決方法 ・子どもへの関わり 失敗体験と成功体験 自分の関わりと教師の関わり </p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ年齢の子どもの生活自立度を比較し、何故違いがあるかの考察をした ・教師から情報を得て、教育を受ける機会の少ない子どもの日常生活と集団生活経験の少ない子どもの生活態度を観察した ・年齢の異なる子どもを観察した。その結果、学生に対する子どもの要求が、年齢によって違うのは、何故かを既習知識を用いて考察した ・年齢の異なる子どもの運動機能について観察したことを比較しながら、何故違いがあるのかを既習知識を用いて考察した ・年齢の異なる子どもの喧嘩と教師の喧嘩介入度の変化を観察し、喧嘩解決方法の違いを考察している ・集団生活の中で気になる子どもの行動に注目し、行動を促しても変化しなかった（失敗体験）が、自分が見本を見せる行動をとったところ相手に変化（成功体験）するという体験をした ・子どもの自立に向けて、自分なりに関わってみたという体験と、教師が子どもの反応をとらえて関わっていることを観察したことにより、相手の反応を感知し、相手の立場から考えることの重要性を考察している
<p>指導者を参考にする</p>	<p><指導者> <ul style="list-style-type: none"> ・教員からの助言 ・子どもの遊びに教師が関わることで学習が広がるという様子 ・教師が子どもの個別な反応をとらえて関わっている様子 ・教師の喧嘩介入度の変化 </p>	<ul style="list-style-type: none"> ・甘える子どもの対応に困惑し、教員に相談した結果、家庭による愛情の注がれ方の違いを助言され、子どもの個別な反応と家庭環境の特殊性が結びついた ・教師から情報を得て、教育を受ける機会の少ない子どもの日常生活と集団生活経験の少ない子どもの生活態度を観察した ・子どもの遊びに教師が関わることで学習が広がるという様子を観察したことにより、相手の反応を感知し、相手の立場から考えることの重要性を考察している ・子どもの自立に向けて、自分なりに関わってみたという体験と、教師が子どもの反応をとらえて関わっていることを観察したことにより、相手の反応を感知し、相手の立場から考えることの重要性を考察している ・年齢の異なる子どもの喧嘩と教師の喧嘩介入度の変化を観察し、喧嘩解決方法の違いを考察している
<p>既習知識を活用する</p>	<p><既習知識> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎看護学 人間発達論 文献 ・自己の擬似体験 </p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎看護学の既習知識を想起している ・他の子どもと異なる反応をする子に注目し、自己の似た体験を活用して思いを推測している ・発達課題を達成している様子が、人間発達論の既習知識と結びついた ・文献から、実際に見て学んだことの根拠を確認した ・年齢の異なる子どもを観察した。その結果、学生に対する子どもの要求が、年齢によって違うのは、何故かを既習知識を用いて考察した ・年齢の異なる子どもの運動機能について観察したことを比較しながら、何故違いがあるのかを既習知識を用いて考察した
<p>具体と抽象が結びつく</p>	<p><結びつく> <ul style="list-style-type: none"> ・健康な幼児の発達の妨げになる集団生活の減少および教育の機会の減少と看護の対象の環境 ・子どもの個別な反応と家庭環境の特殊性 ・発達課題を達成している様子と人間発達論の既習知識 </p>	<ul style="list-style-type: none"> ・健康な幼児の発達の妨げになる集団生活の減少および教育の機会の減少と看護の対象の環境が結びついた ・甘える子どもの対応に困惑し、教員に相談した結果、家庭による愛情の注がれ方の違いを助言され、子どもの個別な反応と家庭環境の特殊性が結びついた ・発達課題を達成している様子が、人間発達論の既習知識と結びついた

V. 考 察

1. 学生の学びの内容

学生が学んだ中心的なテーマのうち、<人間は日々成長・発達する><人間は環境に影響される><人間には個人による違いがある><人間は社会生活をとおして成長・発達する><対象理解には、社会環境の把握が必要である>の5つは、「人間の成長・発達」あるいは「人間と環境（主として社会環境）の関係」といった概念の内容として集約される。これらは、子どもを対象とした実習での学びが、より「人間一般」としての理解を可能にしていることを示している。すなわち、「人間は社会生活をとおして（社会環境の影響を受けて）、人間として成長・発達していく存在であり、その過程で個人による違いが形成される。人間を理解するには、対象の社会環境を把握することが重要である」という認識の成立を示している。

また、<人間関係を成立させる関わり方がある><援助者の相手への関わりが成長に影響する><もてる力の発達を促す働きかけが大切である>の3つは、「援助者としての関わり」として、<学んだことは看護に発展できる>は「看護」の概念形成へと向かう学びであったと位置づけることができる。学生の捉える「援助」とは、「相手の成長を促進する、あるいは相手のもてる力の発達を促す援助」である。このような「援助一般」に関する理解を土台に、より専門としての「看護」の理解に発展させる学びをしていることが伺える。つまり、学生の捉える「看護」とは、「相手の社会環境や生活過程を理解し、相手の成長・発達やもてる力の発達を促す個々に応じた関わりをする」という認識の形成を示している。

なお、「看護」の理解については、予め実習目的において示唆されていたものではなかったが、それを超えて学生が学びを発展させていったものとして位置づけられる。

一方、「健康」への意味づけの方向性が実習目的において示唆されているものの、5名のレポートの記述上からは主題化が図れていないように伺える。学生は実習に先行し、「健康」の概念について講義を受けており、学生の「学びの内容」のなかに「健康」の理解につながると解釈可能な「もてる力が発達し、達成感や自信が生まれ出される」のような表現はみられている。しかし、学生がその状態を「健康」と表現していないことから、ここでは「健康」に関する意識的な主題化が図れていないと判断することが妥当であろう。この傾向は、次

のようなことによると考えられる。すなわち、保育園・幼稚園児のなかにさまざまな健康問題を抱えているとしても、入院中の児と比較した場合、相対的に健康問題が表面化しにくく、また、児と関わっている保育士・幼稚園教諭の専門性は、「健康問題」を援助することではないため、健康問題の学習に適した場面との遭遇が実習期間内には少ないことが予測される。従ってその学びのためには、かなりの指導が必要であることが示唆されている。

2. 学生の学びの方法

「特定の子どもに注目する」、「子どもの対応に困惑する」という学びの方法は、乳幼児集団のなかで他児と違う背景におかれていたり、他児と違った反応を示す子どもとの関わりから学んでいることを指している。これは、集団の中で個をみることにより可能になる方法だといえる。さらに、「観察結果を比較する」という方法は、集団の中の個がもつ条件・反応の比較対照の組み合わせを変えることで様々な学びとなり、比較を通して対象理解を深めることが可能である。

「指導者を参考にする」という学びの方法については、ここでいう指導者とは保育士や幼稚園教諭である場合が多いので、看護の視点というより保育や教育の視点から学んでいることを指す場合が多い。この方法が学びの内容にどのように反映されているのか検討することが必要である。

「具体と抽象が結びつく」ことにより、教育の場面での事象を看護の場面に置き換えて考えたり、乳幼児の個別な反応がその子どもの置かれた環境の特殊性と結びついたりなど、学生が最初に捉えた事象からの学びの飛躍が可能となっている。さらに、「特定の子どもに注目する」「子どもの対応に困惑する」「観察結果を比較する」「指導者を参考にする」という方法は、具体から抽象化を図る方向の思考といえるのに対し、「既習知識を活用する」という方法は、抽象から具体化を図る方向の思考といえる。総じて、学生は「抽象化」と「具象化」の往復を繰り返すことによって、学生の認識が深まっていることが確認できる。

3. 基礎看護学実習Ⅰにおける学びの特徴

学びの内容とその際の学びの方法を対応させたものを表3に示した。

「人間は社会生活をとおして発達する」という学びの内容は、6つの学びの方法のうち全てを用いて学ばれていた。このことから、実習においてこのテーマが

表3 学びの内容と学びの方法の対応

学びの内容 \ 学びの方法	特定の子どもに注目する	子どもの対応に困惑する	観察結果を比較する	指導者を参考にする	既習知識を活用する	具体と抽象が結びつく
人間は日々成長・発達する			○	○	○	
人間は環境に影響される	○		○	○	○	
人間には、個人による違いがある	○		○	○	○	○
人間は、社会生活をとおして成長・発達する	○	○	○	○	○	○
対象理解には、社会環境の把握が必要である	○	○		○	○	○
人間関係を成立させる関わり方がある	○	○		○	○	○
援助者の相手への関わり方が成長・発達に影響する	○	○	○	○		
もてる力の発達を促す働きかけが大切である			○	○		
学んだことは看護に発展できる						○

学びの多くを占めていることがわかる。

また、「指導者を参考にする」という学びの方法は、「学んだことは看護に発展できる」を除く全ての学びの内容に対して用いられていた。ここで言う「指導者」は保育士や幼稚園教諭を指す場合が多い。従って、学生は「健康な乳幼児の成長・発達を援助する」という視点からの専門的認識に触れる場面が多かったことが推察される。

一方、「学んだことは看護に発展できる」という学びの内容は、少ない数ではあったが「具体と抽象を結びつける」という学びの方法によって行われている。和住ら（1999）は、初年次の学生の看護の専門的認識の形成には、看護職者としての専門的水準に達した認識に触れる体験が重要であることを述べている。これは守屋（2002）が、乳幼児との関わり場面を、看護の概念に照らし合わせる方向で指導することで、看護の学びが可能だとしていることと重なっている。このことは、本実習での保育や教育の専門家を参考にした学びを、看護としての認識へと発展させることをさらに期待する場合には、看護教員の認識を介入させていく必要性を示唆している。

以上のことから基礎看護学実習Ⅰには、健康な乳幼児の成長・発達を援助する場で実習を行うことにより、「人間は社会生活をとおして発達していく存在である」という認識の成立を図り、そのための援助の実際を通して、相手との人間関係を成立させたり相手の成長・

発達を援助する関わり方の必要性に関する認識を深めるという特徴があるといえよう。

4. 基礎看護学実習を保育園・幼稚園で行う教育的意義

本学の基礎看護学実習Ⅰの教育効果について、最初に健康障害をもつ人間やその生活環境を理解することから開始する実習形態で行った場合（小野ら 2001、鈴木ら 2002）に比較し、次のような特質がある。つまり、今後看護の対象となる人間をみつめる学生に、まず、「その人は、社会環境や生活過程のなかでどのようにつくられてきたのか?」「そのようなその人の成長・発達を促す関わりとはどういうものか?」と考えていく枠組みを提供している。乳幼児期は成長・発達が著しい時期であるため、保育園・幼稚園は人間の成長・発達の様相を理解しやすい学習の場である。その集団の中での個の反応と個への援助者としての関わりを教材に、人間が社会環境のなかで形成されその援助のあり方を「抽象化」「具象化」の往復を繰り返すことで、次のような看護の基盤となる認識の形成を可能にしている。すなわち、「健康・不健康あるいは発達段階を問わずどのような状態にあっても、人間の成長・発達の可能性を捉え、それを援助する」という認識である。

Ⅵ. おわりに

1. まとめ

- ①基礎看護学実習Ⅰにおいて学生は、＜人間は日々成長・発達する＞＜人間は環境に影響される＞＜人間には個人による違いがある＞＜人間は社会生活をとおして発達する＞＜対象理解には社会環境の把握が必要である＞＜人間関係を成立させる関わり方がある＞＜援助者の相手への関わりが成長に影響する＞＜もてる力の発達を促す働きかけが大切である＞＜学んだことは看護に発展できる＞という9つの内容を学んでいた。
- ②学生は上記の内容を、＜特定の子どもに注目する＞＜子どもの対応に困惑する＞＜観察結果を比較する＞＜指導者を参考にする＞＜既習知識を活用する＞＜具体と抽象を結びつける＞という方法で学んでいた。
- ③保育園、幼稚園で初期の基礎看護学実習を行う意義は、人間が社会環境のなかで形成され、その援助のあり方を理解することで、「健康・不健康あるいは発達段階を問わずどのような状態にあっても、人間の成長・発達の可能性を捉え、それを援助する」という看護の基盤となる概念の形成を促す学びの場を提供することにあるといえる。

2. 本研究の限界

本研究は次の3点により、収集されたデータの質に限界がある。1) 研究素材となった学生のレポートが書かれた背景に、一定の条件が負荷されていること、2) 記述内容に関する解釈の確認を学生に行っていないこと、3) データは、学生自身による記述に限られており、その場の指導者や研究者による観察データを総合したものではないこと、である。

看護基礎教育における教育評価研究においては、看護に関係する概念の理解以外にも、「看護者」となっていくことのアイデンティティの形成や、人間としての全体的な自己成長といった側面からのアプローチも可能である。これらは、学生の内面で相対的に発展していくものであろうが、本研究は、看護に関係する概念形成の観点に絞り、健康な乳幼児施設における基礎看護学実習のもつ意義を明らかにしようとした。

3. 今後の課題

本研究は5名のレポートの分析を行ったが、今後はレポート数を増やし学びの内容と方法の全体像を把握

することが必要である。また、学生による学びの内容や方法の特徴と学生の背景との関係も明らかにしておくことが必要かと思われる。

謝辞

学生の方々には、本研究に協力し実習レポートの使用を許可していただきましたことを感謝申し上げます。学生の方々の学びから教員もまた学ぶことができ、教員-学生間の学びの相互補完性をあらためて確認することができました。

引用文献

- 守屋治代 (2002)：基礎看護学実習において、子どもとの関わりから学生が学ぶこと，日本看護学教育学会誌，12，170.
- 小野晴子、杉本幸枝、七井英子ほか (2001)：基礎看護学1日実習の効果と位置づけの検討，新見公立短期大学紀要，22，53-63.
- 鈴木淳子、島田千恵子、山口瑞穂子ほか (2002)：基礎看護学実習における学生の学びに関する縦断的研究第1報，日本看護学教育学会誌，12，200.
- 和住淑子、山本利枝、斉藤しのぶ (1999)：模擬患者への看護を初めて体験した初年次看護学生の体験内容と認識の特徴，千葉看護学会誌，5 (2)，49-54.
- 吉田章宏 (1995)：教育の心理，放送大学教育振興会，東京.